

国語学史の理論

伊 土 耕 平

一・はじめに

ここに言う「理論」とは、方法論の意である。本稿のテーマは、国語学史記述の方法論である。「国語学史」とは、国語学という学問の歴史」ということで、それを記述するのに何か方法論上の問題があるのか、と訝しく思われるかもしれない。

国語学の世界では時枝誠記『国語学史』（一九四〇）が、国語学史の研究には国語学研究上の実践的な意味があると主張した。すなわち、国語学史はつまるところ国語に対する意識の発達史である。過去の国語意識を明らかにすれば、日本語の本質的な部分を理解するための示唆が得られる、と言うのである。

これは画期的な考え方である。時枝以前は近代以前の研究には学問的価値がないとすることが主流だったが、時枝以後、再評価されるようになったからである。

本稿は、時枝の国語学史理論の国語学史研究上の位置づ

けを確認することと、時枝理論を若干修正することが目的である。ただし、その修正は以前に述べたことがあり、かつ、ほんの小さなことである。

なお、最近は「国語学」ではなく「日本語学」という言葉を用いることが多いが、本稿で問題となるのは主として伝統的な議論なので、ここでは「国語学」という語を使用する。また、いわゆるハーバード方式で文献を示すが、重要なものは書名も示す。以下、引用中の漢字には現行の字体を用いる。が、仮名遣いや送り仮名は原文のままである。

二・時枝以前

まずは時枝以前の研究を概観しておきたい。国語学史の研究書で最初のもの、保科孝二『国語学小史』（一八九九）であるとされる。この本においては、契沖以前の研究を仮名遣、手爾遠波などの分野別に概観し、契沖以後については研究者ごとに研究内容を紹介するという体裁をとっている。それら過去の研究について、最初の方では、今日の言

語学上に貢献すべき結果はない、などと辛口の言い方をしているが（四頁）、個別の研究者については高く評価するものも多くあり、最終的には「我々の任務は」先輩の研究の不十分なるところを補ひ、次ぎに先輩がまだ着手しなかつた点に向て、新生面を開き、段々研究の領分を押し拡めて、而して我が国語の世界に於ける地位を進めて行くといふことでありませう」としている（四五二頁）。「不十分」と言うからには、それなりの評価をしていると考えるべきだろう。

おもしろいのは、現在、我々は西洋科学を利用できる地位にあるが、現在の日本語研究は徳川時代のそれを凌駕することができていない。明治十九年に東京帝国大学に博言学科ができてまだ十数年だからしかたないのかもしれない、と言っていることである（四五四頁）。つまり、明治以前の研究を批判しつつ、現在自分たちはそこまで到達していないと言っているわけである。本書は連続講義のようなものを文字化したものであるから、聞き手（おそらくは国語関係者）を鼓舞する意図もあるのだろう。

保科は本書のあとにも、『国語学史』（一九〇七）、『新体国語学史』（一九三四）という二冊の国語学史書を書いている。前者においても、過去の国語研究はさほど取るべきものがなかった。その理由は、日本語の一部分しか研究対象としていなかったこと、比較言語学的研究がなかったこ

となどであると言っている（第三章 従来の国語研究に対する概観）。後者もほぼ同様であるが、『国語学小史』から三十年以上が経過していることもあり、現在の日本語研究が徳川時代に劣るとは書かれていない。日本語の科学的な研究は明治末から発達したと書かれている（「序」）。後者にはさらに、明治以前の研究は、あまり価値はないが、量が多いのでひとわり知っておくことが国語教育者や国語学者には必要である、本書は中学教員検定試験用である、などとも書かれている（同上）。国語学者ばかりでなく、国語教育者にも国語学史の知識が必要であると考えていたことが窺われ、興味深い。

以上、保科の国語学史記述方法をまとめると、時枝（一九四〇、十五頁）の言うように、現代の言語学の理論によって過去の研究の欠点を修正するというものである。

次に長連恒『日本語学史』（一九三四）について述べる。これは「日本語学」という語を早くに使ったという点で有名な本である。時枝（一九三二）より少しあとだが、考え方は保科に近く、過去の日本語研究は幼稚、散漫、浅薄などと言っている（八頁）。言語の科学的な研究は十九世紀末のポップ、グリムらが最初であるとするので、論理的に言っても、それ以前の研究は科学的なものでないということになる。保科と同じく、現在の水準から過去の研究を断罪する態度である。その他のことも、保科と同様のことを

言うところが多い。富士谷成章、本居宣長らの研究を評価していることも保科と同じである。

次に山田孝雄について述べる。山田には『国語学史要』（一九三五）、『国語学史』（一九四三）という国語学史の著作があるが、両書の序文に、大正十（一九二一）年に国語学史の初稿が成り、以後、日本大学と東北帝国大学で講じたとある。これがどのようなものであるかは不明だが、山田の学問の完成度の高さを考えると——例えば二冊の大著『日本文法論』（一九〇八）と『日本文法学概論』（一九三六）は約三十年の開きがあるが理論的枠組みの違いはない——、基本的な考え方は一九二一年の時点ですでに成立していた、と考えるもおかしくはないであろう。本稿では、山田の国語学史の理論を時枝のそれより前に位置づけることにする。

山田はまず、国語学史にはそれ自体の価値があり、将来の指針を得るためなどの功利的な目的はないと言う。続けて、国語学は（学問一般も）歴史的文化の産物であるから、歴史を知らなくては正当な認識ができない。国語学は日本国民に自発した学問であり、国語学史は、日本国民が日本語を自覚反省したあとを辿ることでもあり、国民の精神生活の歴史的展開の一つの相であるとも言う。また国語学史編述の態度としては、過去の学説があるがままに捉え、現代的な知識によって批判してはならないと言う（以上、山

田（一九三五）六〇—一〇頁）。山田は国粹主義者であり、国語学は日本文化の産物であるから尊いという考え方をする。保科や長のように、現在の水準から評価することもないし、今後の研究に活かすという考えもない。

時枝の『国語学史』（一九三三）は山田の『国語学史要』より前であり、岩波講座日本文学の一冊でもあるから、山田が時枝学説を読んだ可能性は高いだろう。しかし、山田の厳然たる文章からは、他から影響を受けたとは思えない。少なくとも、過去の研究から示唆を得るといふ態度はとらない。

次に、安藤正次『小さい国語学』（一九二四）について述べる。これは一般向けの国語学概説書なのであるが、第六章が「国語学の発達（国語学史要）」で、「国語に対する意識の発達」が取り上げられている。時枝の考えに近いが、文化史的な興味で書かれたものである。奥付によれば、この本は一九二四年の八月に刊行されている。それに対して時枝の卒業論文（時枝、一九二四）は同年十二月に脱稿した。しかし、卒業論文のアイデアの骨格は四箇月以上前にはできていたであろうから、『小さい国語学』の影響はないと本稿では考える。ちなみに、時枝（一九四〇）末尾の「現代国語学主要書目」に『小さい国語学』は載っている。次に橋本進吉について述べる。橋本の「国語学史概説」（一九二八）は東京帝国大学における講義ノートである。

第一章が「古代日本人の言語意識」で、「専門の研究も（中略）民衆の俗信や素樸な考の中から徐々に芽生えて行く事が屢あり、又相当に発達してからも、猶、かやうな素人考からの影響を免れがたい事もあるのであるから、決して観過することが出来ない」と言う（十八頁）。そして言霊、原始的な語源説などに言及する。これらをまとめて「古代日本人の言語に関する観念」（二七頁）、「言語意識」（二八頁）と言っている。

後述するように、時枝後の国語学史書は古代人の国語意識から記述を始めるものがほとんどである。その先蹤がすでに昭和初期に見られることは興味深い。私の立場から見ると興味深いのは、橋本が「意識」と「観念」を区別しないことである（後述）。

橋本の講義は時枝（一九二四）より四年あとだが、時枝（一九二四）ではまだ「意識」という語は使われていないので（後述）、時枝が橋本に影響を与えたことはないと考えられる。

以上、はなはだ雑ではあるが、時枝以前の状況について述べた。さまざまな考え方があったように見えるが、最初に述べた保科は、周知のように文部行政に影響力のあった人物である。近代以前の国語研究に価値なしと言う保科の意見に、影響された国語学徒は多かつたのではないか。刊行された国語学史書のほとんどすべてを調査した猿田知之

（一九九三）は、保科の『国語学小史』が「以後の学史書の形式を固定化するものとなった」と言う（八九頁）。本稿でも、山田などの例外はあるにせよ、大勢は保科流に、近代以前の国語学を軽視していたと考えることにする。

三、時枝の理論

時枝（一九四〇）については、すでに少し述べた。ここではそれよりさらに前の時枝『日本ニ於ル言語観念ノ発達及言語研究ノ目的ト其ノ方法（明治以前）』（一九二四）——すなわち時枝の研究者としての出発点である卒業論文——から見ることとする。

まず、若き時枝は「言語トハ何ゾヤ？」という大問題を設定する。言い換えれば「言語観念」の問題である。すなわち、言語をどのようなものとして見るか、ということである。次のように言う。

「従来ノ言語研究者ハ如何ナル言語観念ヲ有シテ居ツカトイウコトデアル。彼等ノ跡ヲ辿ルコトハ又将来ノ言語観念ヲ建設スベキ基礎デアル。従来ノ学説ハ要スルニ各研究者ノ言語観念ノ発現ニ外ナラナイ。」（八頁）

「私ハ出来得ン限りソノ研究者ノ心ニナツテ、彼等ガ如何ニ言語ヲ見テ居ツカヲ素朴的観念ヨリ近代ノ進歩シタ観念ニ至ル迄ソノ発達ノ跡ヲ辿ラウト務メタ。」（一六頁）

のちの時枝（一九三二）、同（一九四〇）では、過去の

言語意識から方法論的なヒントを得るためという点が強調されるようになるが、この卒業論文の段階ではむしろ言語観そのものを問題にする傾向が強い。

また「観念」という言葉であるが、のちに指導教官である橋本進吉の助言により「意識」という語に変更した。例えば時枝（一九四〇）末尾には著述目録があり、その先頭に卒業論文が挙げられ、題名は「日本に於ける言語意識の発達及び言語研究の目的とその方法」となっている。その変更の事情は、卒業論文本体の一頁に貼られた付箋によって知られる。そこには「本論文中二用キラレタ「言語観念」トイフ言葉ハ「言語意識」ト訂正シタ方ガヨイ橋本先生ノ御注意」とある（明治書院刊本の付一頁）。

近世以前の研究者はそれほど明確な「観念」は持っていないなかった、それは「意識」と呼ぶべき漠然としたものであった、という考え方であろう。橋本の意見は妥当である。後述するが、漠然とした意識から明確な観念という発達段階を設定し、国語学の研究の進展をそれらと関係づけようというのが、前田富祺や私などの考え方である。

次に時枝『国語学史』（一九三二）を取り上げる。この本での考え方を要約すると、まず、自然科学の対象とは異なり、言語は浮動性を有しているので、国語を対象として明確に把握することが重要問題である、ということから始まる。そして次のように言う。

「言語意識の広狭深淺は、即ち国語学上の問題と研究の方向とを規定するものであつて、国語学の体系は、実に此の言語意識の上に構成せられるものである。」（五頁）

その「言語意識」はどのように形成されるかと言えば、「元來、国語は常に臆氣に統一せられた対象であつて、それは宛も一つの星雲の如きものである。この対象に対して、若し我々の注意がその一点に集注せられるならば、この一点はレンズの焦点に入つた樹木の一葉の如くに、極めて明瞭な映像を脳裏に映せしめる。国語に対する一つの意識は、此の如き映像に他ならない。（中略）我々の注意が更に転ずるならば、（中略）焦点は次第に転じて、国語はその対象性を次第に明確に意識の中に形作る。」（五―六頁）

卓抜な比喩である。ここには仮説演繹法的な発想が見られる。さらに、国語学史の本質について次のように言う。「その本質を云ふならば、言語意識構成の史的展開といはねばならない。」（六頁）

「現代言語意識に対する反省、自己批判を行はうとするものにとつては、過去に於いて意識せられたもの、自覚せられたものは、自己の姿を吟味する鏡であり、又自らの意識を構成する為の指南車でもあり得る。過去に於ける国語の意識を顧みることは、即ち国語学史の主要な任務とする処のものである。」（六頁）

つまるところ、現代の国語学は「現代言語意識」の上に

築かれるべきであり、その意識を構成するために、過去の研究者の持っていた国語意識を明らかにして、それを参考にせよ、ということである。

一九三二年版は「星雲」の比喻ばかりが印象に残ったが、最後に一九四〇年版『国語学史』を見よう。まず、有名な国語の定義が述べられる。すなわち国語とは「日本語的性格を持った言語」であると(三頁)。これについては定義になっていないという批判がなされることがある。確かに、定義する文の中に定義される語が入っているのは問題のようにも見える。しかし、その批判は当たっていない。そういう批判をする人は仮説演繹法がわかっていない。

この定義をもう少し詳しく説明すると、国語学の仕事は「対象として与へられた無規定な日本語を、それ自体の内にも有する原理即ち日本語的性格なるものを明かにしつゝ、対象を輪郭付けて行くことである」(八頁)、「対象の本質観の不断の改訂によつて次第にその目標に到達することが出来る」(九―一〇頁)ということになる。これは一言で言えば、「国語の発見」であり、例えて言えば「宛も望遠鏡を以て星を探索しつゝ、究極に於いて天体の構造を明かにする様なものである」(一一頁)。

また、次のような言い方もしている。

国語学の体系は(中略)その根本の意味に於いては、

研究者が国語に就いて発見した事実の整理統一であり、換言すれば研究者の国語に対する意識の整理統一であるといふことが出来る。この様な国語学は、研究者の眼に映じた国語現象の理論的な投影であり、模写であるといつて差支ない。これに反して、若し或る与へられた理論なり範疇なりによつて整理された体系であるならば、それが如何に輪奐の美を持たうとも、そこには幾多の重要な事実が網の目を漏れる様に見逃がされて居るであらうかも知れない。所詮それは国語の現象を鑄型に流し込むに等しいものである。(二三頁)

以上のような手順で日本語の本質を明らかにするのが国語学であるとする、その歴史である国語学史はどのようなものか。まずは「私にとつて国語学史は、国語学の体系を建設するに必要な一の方法論的実践としての意義を持つものである」(一二頁)と言う。詳しく言うと、

私は明治以後の国語研究が多分に外国の言語理論の適用に急であるのに対して、明治以前の国語研究には、自らの力によつて国語現象を発見しようとする態度が著しいのを見出した。従つて明治以前の国語学史は、過去の研究者の国語に対する意識の展開であるといふことが出来ると思つた。そこには理論の貧弱さと、体

系の不備とが認められるにも拘はらず、猶国語に対する凝視より生まれた発見的事実を見出し得るのであつて、私は国語学史を調査しつゝ、国語の眞の投影を捉へることが出来るのではないかと考へた。国語学の眞義が、国語意識の理論的体系であるとするならば、国語学史は国語意識の展開の歴史であるといふことが出来、我々が、この過去の展開を継承して、新しい発展を試みる所に今日以後の国語学が建設せられるのではないかと考へたのである。(一四頁)

思い入れがあるので、つい引用が長くなつてしまつた。要約すると「国語学史が研究者の意識に映じた国語の投影であることによつて、国語学史を通して、原物である国語の姿を把握することが出来る」(一八頁)のである。

「自らの力で発見しようとする」したがつて、意識の展開である^レというところは、論理が少し飛躍していると思ふが、全体的にはとても魅力的な考え方である。

しかし、本書における実際の記述を見ると、あまり意識そのものの展開になつていない。例えば、各期(五期に区分されている)に「仮名遣観」についての記述があるが、それらは言わば分断されており、通時的な^レ仮名遣意識史にはなつていない。「意識の展開」ということをはっきりと記述するためには、時代別に記述するのではなく、特定

の項目に対する意識を通時的にたどるのがよいというのが、私の考え方である(後述)。

具体的に時枝が国語学史の調査によつて何を得たかと言へば、有名な「詞辭」論が代表的なものである。しかし事實は逆であらうと北原保雄(一九八一)は言う。少し長い^レが、そのまま引用する。

詞と辭の区別は、鈴木胤において、すでに示唆されているのである。それは、時枝自身の指摘していることである。ただ、時枝は胤の説を祖述したのではない。胤の説とは関係なしに論を立て、そういう考えをもつた頭で、『言語四種論』を詠んだら、自分の考えに共通するものであることに気づいたというのが事實に近いであらう。真理は向うの方からやつてくるものではない。発見されるものである。見える眼をもたない人には全然見えてこないものである。(三三三頁)

既述のように、時枝は演繹的発想をする。そのことからすれば、北原の言うとおりかもしれない。しかし、より一般的に言えば、仮説(ここでは詞辭論)とデータ(ここでは鈴木胤説)は相互作用なのである。常に仮説が先と決まつているわけではない。

以上、時枝理論について概観した。時枝はもと「觀念」

という語を使っていたのを、橋本の助言で「意識」に変更し、以後その語を使用している。これに対して私は、言わば両者を止揚する立場である（後述）。

四・時枝以後

時枝以後の国語学史研究書は、国語意識（言霊信仰、古語意識、方言意識、など）の記述から始まることが多くあった。手許にある国語学史の本を見てみると、福井久蔵（一九四二）と東條操（一九四八）と田辺正男（一九五九）は言霊の話から始まり、三木幸信・福永静哉（一九七二）は「上代 国語意識の揺籃時代」から始まり、古田東朔・築島裕（一九七二）は「国語に対する言語主体の種々の意識」から始まり、此島正年（一九七六）は「古語研究の前提としての古語意識」から始まり、馬淵和夫・出雲朝子（一九九九）は「古語意識」から始まっている。

逆に時枝以前はどうか、念のため確認してみると、保科（一八九九）、同（一九〇七）、同（一九三四）、吉沢義則（一九三〇）は仮名遣の話から始まり、長（一九三四）は作歌の方式と綴り字の学習に関する話から始まり、小島好治（一九三九）は辞書の話から始まる。国語意識への言及から始まるものは、これら六冊中には一つもない。

あまり調査の範囲は広くないが、以上のことから、時枝の国語意識重視の姿勢が後に続く国語学史書に影響を与え

た、と推測する。時枝理論の影響力の大きさが再確認される。古田・築島（一九七二）などは、時枝の方法に従ったと明言している（一頁）。もともと、先述の安藤正次のように、時枝以前にも国語意識を取り上げた人はいいたので、安藤説のほうが後の人に影響を与えたということも考えられなくはない。しかし時枝は一九四三年に東京帝国大学教授となり、多くの優れた研究者を育てた。その影響力は大きかったと考えるべきである。ちなみに根来司（一九八五、一五六頁）には、時枝（一九四〇）に対する学界の熱い反応が紹介されている）。

さて、国語意識だけではなくもっと広い視野から、時枝以後の国語学史研究について概観することにする。以前、拙稿（一九九七）において「共時的／通時的」「学説史／意識観念史」という二組の観点で、それまでの研究を整理した。もちろん「学史」と言う以上、「通時」的でないものはないので、あくまで程度問題である。時代区分をしてその時代ごとに学説などをまとめるものを「共時的」と言い、複数の時代を貫いて特定項目の変遷を見ようとすることを「通時的」と言ったのである。代表的な研究を位置づければ次のようになる。

	学説史	意識観念史
共時的	古田築島など	時枝・永山など
通時的	福井など	大久保など

詳しくは拙稿をご覧いただきたいが（ネット上でも見ることが出来る）、重要ないくつかの研究について、また拙稿では見落としていたもの、拙稿の後に出了た研究についても、ここに少し述べておきたい。

まず時枝（一九四〇）だが、これは先述のように、時代区分をして、各期ごとにどのような国語意識があったかを記述しようとする。よって「共時的・意識史」である。同様のものとして永山勇『国語意識史の研究』（一九六三）という大部な本がある。これは上古・中古・中世に時代を区分し、それぞれの時代に見られる「古語意識」「方言意識」などを記述している。

その後のものとしては佐田智明『国語意識史研究』（二〇〇四）がある。中世前期・同後期・近世に区分し、それぞれにおける国語把握／意識を詳細に記述している。ただし佐田説は複雑で、なかなか理解しにくいというのが正直なところである。

次に「共時的・学説史」について述べれば、これが国語

学史書の中で一番多いタイプである。先述の古田・築島（一九七二）は現在でもよく読まれているようである。ちなみに本書は「過去の研究者たちの研究意識に重点を置いて考察する」とするが（一頁）、私の読む限り、最初に古代人の国語意識に言及するだけで、その後は「学説史」である。少し毛色の異なるものとして、『国語学史の歴史』がある。猿田知之『日本語思想史』（一九九三）で、第1部が『国語学史』史の試み」となっている（「史」字が重複していることに注意）。刊行されたほとんどすべての国語学史書を調査し、明治・大正期、昭和初期、昭和後期の三期に分け、各期の特徴や個々の研究書の内容について述べている。大変な力作である。

次に「通時的・学説史」であるが、単行本はあまりないようである。管見のかぎり、福井久蔵『増訂 日本文法史』（一九三六）が代表的で、文法研究史の流れを記述している。もっとも、これは時枝（一九四〇）より少し前の本である。拙稿の後ものでは馬淵・出雲（一九九九）が、音韻研究・仮名遣研究などのテーマごとに通時的に研究史を記述している。さらに言えば、単行本は少なくとも記述自体は多い。と言うのは、多くの日本語研究書にはその本が対象とする研究テーマの学説史（研究史）が含まれているからである。また、概説書ではあるが、佐伯梅友・中田祝夫・林大編著（一九六〇）が研究テーマ別に、簡潔に通時

的学説史を記述している。

最後の「通時的・意識観念史」が、これまであまり書かれてこなかった。しかし、これこそ国語学史の中心に位置づけられるべき記述方法であると考ええる。なぜなら、対象の本質的な部分の発達のさまが明らかになるからである（それが記述者の主観によるものであるにしても）。具体例としては、佐田（一九九三）——上述の書とは別の論文——が中世から近世にかけて通時的に「語」意識の発達を記述している。また、拙稿（一九九七）では文観念の発達史、同（一九八六）では文章構造観の発達史を記述した。大久保忠利『日本文法陳述論』（一九六八）は第一部の中に「『文』意識展開の実証的研究」と『文内構造』意識展開の実証的研究」という節があり、明治期の文意識について詳細に記述している。興味深い「通時的・意識史」であるが、明治以後の「文観念」の発達については書かれていない。

以上、時枝後の国語学史研究について、時枝理論の影響を確認し、また、二組の観点で整理したうえで、「通時的・意識観念史」が少ないこと、それが国語学史の中心に位置づけられるべきものであることを指摘した。

五・国語学史の理論

時枝理論の要点は、国語学史を国語意識の展開史である

と捉えることによつて、現在の研究に大きな示唆を得ることができるといふことである。それに対して拙稿（一九九七）では、「意識」↓「観念」という発達段階を考え、「通時的・意識観念史」の一例として、文意識・文観念の発達を記述した。自分では時枝理論を改善したつもりであったが、同様の考えをすでに前田富祺（一九七六）が二十年前に発表していた。不明を恥じるしかない。

前田の考えを要約して、簡条書きにしてみよう。

- ・ 国語意識 ≡ 国語を使用している人が国語に対して持っている意識。実際の国語使用を支配する。ある表現が正しいか否かの判断の基盤となるものなど。
- ・ 国語意識史 ≡ 国語意識を歴史的に考えたもの。国語史と国語学史との両方の基盤になる。
- ・ 国語観 ≡ 国語に対する見方。独自の判断や意見が加わる。多少なりとも理論的に整理されている。国語意識に支えられている。国語研究の基盤となっている。
- ・ 国語観史 ≡ 国語観を歴史的に考えたもの。国語意識史と国語学史との間に置く必要がある。国語意識史は上代から現代まで続いていると考えられるが、国語観の成立はかなり遅れる。

以上の関係を前田は図1のように示す。そして、国語意

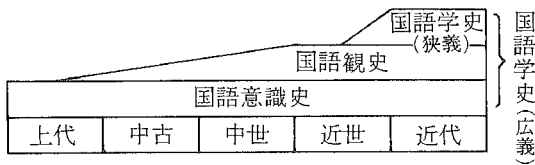


図1. 前田説

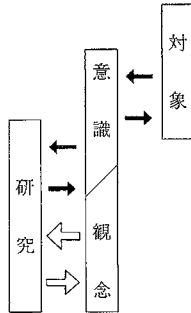


図2. 私案

識史と国語観史を合わせ考えるような形で国語学史を考えることは、上代から現代までの釣り合いのとれた国語学史を作り上げ、現在の国語学のあり方を反省してゆくためにも有益なことであると言う。

時枝は国語意識史イコール国語学史と考えたが、前田のように、意識史を学史の土台のように考えたほうがわかりやすい。さらに、意識史の上、学史の下に国語観念史を位

置づける。私の考えも基本的には同じだが、「国語観史」ではなく「国語観念史」という語を使いたい（観と観念は同義とする）。

前田説と私見とは異なる点もある。図2（拙稿、一九九七より）で説明しよう。言語主体はまず対象を「意識」する。その際、言語主体が対象を志向する方向と、対象が存在を言わば主張する方向と、二方向の作用があるだろう。それを二本の逆向きの矢印で表した。そしてその対象をよく観察・考察するなどして、対象に対してある種の考えなどを持つようになったとき、それを「観念」と呼ぶのである。ただし両者の境目は明確ではない。

そして意識／観念どちらのレベルからも研究は生じるが、観念の方が研究に深く結びついている。それを太い矢印で表した。また、意識と研究、観念と研究は、それぞれ相互作用的関係にある。つまり、意識（または観念）にもとづいて研究するという側面と、逆に、研究することによって対象への意識（または観念）が明確になるという側面もあるのである。もともと、明確になった「意識」というのはすでに「観念」になっていると考えた方がよいのかもしれない。それはともかく、対象が漠然としたままとりあえず調べてみるといった研究もあるであろう。そのようなものは「意識」にもとづく研究と考えるわけである。

観念の発達史をたどることによって、我々は研究史の本

質的な部分を理解できると考える。例えば文観念であるが、拙稿（一九九七）に述べたように、中世の係結び「意識」を承けて、近世の富士谷成章の「呼応による統一観」から文「観念」史が始まる。その後、山田孝雄の「中心統一観」、時枝誠記の「文末統一観」、渡辺実の「全体統一観」へと文観念は発達する。全体統一観で発達は終わるが、それは同時にいわゆる陳述論文法の終わりでもある。

無論この歴史は私が主観的に構成したものだが、日本における構文論発達史の一般的な見方と大きな差はないであろう。例えば北原保雄（一九七六）が、山田↓時枝↓渡辺という流れを考えている。

以上、国語学史記述の方法論について述べた。意識と観念を区別することは必要な修正であると考えられる。しかしそれは、時枝理論全体から見れば、ほんの微々たることにすぎない。

六．おわりに

以上、時枝の国語学史の理論の価値を国語学史研究の歴史の中で再確認し、小さな修正案を示した。「再確認」であるから、注目すべき大発見はとくにない。そもそも、私ごと浅学の者が偉大な先学に論評を加えるなどもつてのほかのことと思うが、ご容赦を乞う次第である。

つまらぬ私事で恐縮だが、そもそも私は学部二年生の

ときに時枝（一九四〇）を読み、いたく感動し、国語学の道に進みたいと思ったのであった。今回、本書を読み返してみても、当時の感動が甦りはしなかったが、理論家としての時枝の偉大さが再認識された。帰納的な研究ももちろん重要であるが、仮説演繹的な研究法は、ときに強い力を生むのではなからうか。

ちなみに私の手許にある本書は、一九八〇年三月二八日に東京神田の八木書店（古書部）で購入したとメモが書かれている。この本は私の宝物である。時枝の直筆の付箋（八×二〇センチ程度）が貼られているからである。それには独特な字体で「謹呈 御加筆御願申上候 時枝誠記」と書かれている。

拙いながらも時枝のあとを追おうと書いた卒業論文の題名は「日本に於ける文及び文章観念の発達とその研究」である（笑われるかもしれないが）。永野賢先生が指導教官であったが、過去最高の評点を下さり、日本で初めての論である、などと褒めてくださった。それで舞い上がったしまったのが私の愚かなところである。しかしこの論文は、書いていて本当に楽しかった。今では毎年、学生に卒業論文の指導をしているが、学生にも同じような楽しい経験をしてほしいと願っている。

引用文献

- 安藤正次 (一九二四) 『小さい国語学』 広文堂書店
伊土耕平 (一九八六) 「文章構造観の発達と文章研究の方
法」 永野賢編『文章論と国語教育』 朝倉書店、所収
—— (一九九七) 「国語観念史の構想」 『上智大学国文
学論集』三〇号
大久保忠利 (一九六八) 『日本文法陳述論』 (増補版、一九
八二) 明治書院
北原保雄 (一九七六) 「文の構造」 『岩波講座日本語6 文
法I』 岩波書店
—— (一九八一) 『日本語の世界6 日本語の文法』 中
央公論社
小島好治 (一九三九) 『国語学史』 (再刊、一九七〇) 刀江
書院
此島正年 (一九七六) 『国語学史概説』 桜楓社
佐伯梅友・中田祝夫・林大編著 (一九六〇) 『国語国文学
研究史大成15 国語学』三省堂
佐田智明 (一九九三) 「国語における語意識の成立の問題
—— 中・近世の詞・詞字を中心に——」 『北九州大学国
語国文学』七号
—— (二〇〇四) 『国語意識史研究』 おうふう
猿田知之 (一九九三) 『日本言語思想史』 笠間書院
田辺正男 (一九五九) 『国語学史』 桜楓社

- 長 連恒 (一九〇八) 『日本語学史』 博文館
東條 操 (一九四八) 『新修国語学史』 星野書店
時枝誠記 (一九二四) 『日本ニ於ル言語観念ノ発達及言語
研究ノ目的ト其ノ方法 (明治以前)』 (東京帝国大学卒業
論文) (明治書院刊、一九七六)
—— (一九三二) 『国語学史』 (岩波講座日本文学のう
ち) 岩波書店
—— (一九四〇) 『国語学史』 岩波書店
永山 勇 (一九六三) 『国語意識史の研究』 風間書房
根来 司 (一九八五) 『時枝誠記研究 言語過程説』 明治
書院
橋本進吉 (一九二八) 『国語学史概説』 『国語学史・国語特
質論 (著作集9・10冊)』 (岩波書店、一九八三)
福井久蔵 (一九三六) 『増訂 日本文法史』 (風間書房再刊、
一九五三)
—— (一九四二) 『国語学史』 厚生閣
古田東朔・築島裕 (一九七二) 『国語学史』 東京大学出版
会
保科孝一 (二八九九) 『国語学小史』 大日本図書
—— (一九〇七) 『国語学史』 早稲田大学出版局
—— (一九三四) 『新体国語学史』 賢文館
前田富祺 (一九七六) 「古代における国語語彙観 —— 国語
語彙論史序説として ——」 (『国語語彙史研究』 明治書院、

一九八五に再録)

馬淵和夫・出雲朝子(一九九九)『国語学史 日本人の言語

研究の歴史』笠間書院

三木幸信・福永静哉(一九七二)『国語学史』風間書房

山田孝雄(一九三五)『国語学史要』岩波書店(岩波全書)

——(一九四三)『国語学史』宝文館

吉沢義則(一九三〇)『国語学史』受験講座刊行会(平凡社内)

(本学教授)